

ヴェトナム, トアティン - フエ省における高地交易に関する調査

著者	中村 理恵
著者別名	NAKAMURA Rie
雑誌名	アジア文化研究所研究年報
号	50
ページ	164(183) - 156(191)
発行年	2016-02-29
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00008041/

ヴェトナム，トアティーンフエ省における 高地交易に関する調査

中村理恵

始めに

本稿は、ヴェトナムのトアティーンフエ省 (Thù'a Thiên Huế) における、高地交易に関する調査の結果をまとめたものである。調査はもともと、海洋交易王国としてヴェトナム中部に栄えたチャンパ (2-19世紀) の経済システムを再現しようという試みから始まった。チャンパは東南アジアで早くからヒンドゥー教を受容した国で、中東、インド、東南アジアと中国を結ぶ海のシルクロードの中継地として、伽羅などの良質の香木を産することで知られていた。チャンパの重要な交易品はほとんどが高地からもたらされたもので、そこは、チャンパの主要民族であるチャムとは異なる民族が住む地域であった。チャンパでは高地からの交易品がどのようにして平野の港に集められていたのか、誰がどうやって、どのようなルートで交易品を平地に運んでいたのか、そのような疑問を解明すべくこの調査は計画された。

過去のチャンパの高地交易を再現するために私達調査チームが目にしたのは、最近まで行われていたヴェトナム中部地方における高地交易であった。中部高地に住むカトゥ (Katu)、タオイ (Ta Oi) などの少数民族は、交易のために川づたいに平野に下りてきていた。彼らの交易ルートや品物を交換する市場周辺からは、チャンパの遺跡や遺物が見つかった。近年まで続いてきたヴェトナム中部の高地交易は、チャンパ時代の高地交易をそのベースにしているという仮定のもと、私達は近年まで行われて

いた高地交易を調査することによって、チャンパの高地交易を再現しようと試みた。

調査を始めるにあたり、私達はベネット・ブロンソン (Bennet Bronson) の河川交易システム (riverine system) を参考にした。ブロンソンのモデルによれば、河川の上流、高地山岳地帯で収穫された交易品は、川沿いに存在する市場に集められ、そこから下流の主要な交易港に運ばれた後、海洋交易によって他の地域に運ばれる (Bronson 1997)。私達が最初に調査地として選んだヴェトナム中部のクアンナム省 (Quảng Nam) とトアティーンフエ省では、高地交易はブロンソンのモデルと同様、地域の主要河川沿いに行われていた。クアンナム省では、トゥボン川 (Thu Bôn) とブウザ川 (Vu Gia) 沿いの市場で、高地交易に従事した人たちに聞き取り調査を行った。トアティーンフエ省では、フエ市 (Huế) を流れるフォン河 (Hu'ông) の支流沿いの市場で聞き取り調査を行い、同時に高地のアルイ地区 (A Lu'oi) で高地交易を行っていた少数民族、タオイ (Ta Oi) やパコー (Pacoh) の人達に聞き取り調査を行った。

本稿は、私が継続して参加している、トアティーンフエ省での調査をまとめた調査の中間報告である。これまでの調査で見えてきたことは、ブロンソンの河川交易モデルは、下流にいる人たちの視点に立ったものだというのである。更に、高地の少数民族に対する「未開で、遅滞しており、食料を探してさ迷い歩く貧しい人たち」という典型的なイメージとは異なる、

複数の言語を話し、ダイナミックで、起業家精神に富んだ高地少数民族の姿も解ってきた。

トアン市場のキン族と高地交易

最初の調査地となったトアン市場 (Chợ Tuân) は、フエ市から西へ約7Kmの、フォン河の支流フウチャック川 (Song Hư'u Trạch) と、タチャック川 (Song Tả Trạch) が合流する地点にある (写真1, 2)。トアン市場には、バンクー寺 (憑居寺 Chù'a Bắng Củ) という阿弥陀仏を祀る小さな寺がある。現在ある寺は、村人たちによって1930年代に建立されたものだが、調査グループの考古学者は、この寺の起源はチャンパ時代のもので、チャンパの遺跡の上に建てられたのではないかと推測している。

この地域のキン族 (Kinh, ヴェトナムの主



写真1. ○がトアン市場の位置 (グーグル衛星マップから転写)



写真2. トアン市場, 2014年 (チャン・キ・フー (Trần Kỳ Phú'o'ng) 撮影)

要民族, ヴェト族) は、田畑にできる土地が少なく度々洪水の被害に見舞われ、川での漁業も振るわないため、ブオン・トゥング (buôn thu'ợ'ng) とされる高地少数民族との交易を行ってきた。

高地交易はもともと貨幣を使わない物々交換であった。高地からトアン市場にもたらされた交易品は、蜂蜜, 蜜蠟, 唐辛子, キノコ, 漁業用の網を作るために繊維を取るガイ (gai) という木 (写真3), 樹皮 (vot), 香木等。それに対して、トアン市場やもっと下流にあるフエ市の市場から高地にもたらされる交易品は塩, 儀礼用のドラム, 甕, 衣類などであった。

トアン市場のキン族の交易活動には、高地からやってくる少数民族と交易する方法, トアン市場から高地に行き、高地で少数民族から必要な品物を集めてくる方法という二つがあった。平地で高地少数民族が交易品を持ってやってくるのを待っているか、必要に応じて高地に行き交易するかは、交易活動を行う人の言語能力によるものではないかと推測される。例えば、トアン市場で高地交易をしていたファム・ティ・ナムさん (女性) (Phạm Thị Nam) は少数民族の言葉を話せず、高地からトアン市場にやってくる少数民族と交易を行っていた。それに対して、少数民族の言葉が話せたヴォ・スアン・ニョーさん (男性) (Võ Xuân Nhỏ) は高地に行きしばらく滞在し、村々を回って必要な品物を集めてトアン市場に運ぶという方法をとっていた。ニョーさんは高地で集めた交易品を、少数民族の人達のコミュニティ・ハウスに保管してもらい、トアン市場に帰る時は、雇った少数民族の人達に交易品を運搬してもらっていた⁽¹⁾。

この二種類の交易活動に共通してみられる特徴は、交易相手が「顔見知り」であることだ。ナムさんは交易のためにやってくる少数民族と親子のような関係を結び、自分の家に彼らを泊めて、食事の世話などをしていた。ナムさんと交易した少数民族の人達は、トアン市場ではナ



写真3. ガイの木、アルイに住むタオイ族は交易のためにこの木を植えて育てていた(チャン・キ・フーン撮影)。

ムさん以外の人とは交易をせず、ナムさんの所で手に入らないドラムや甕等は、ナムさんが紹介した中国人の商人から入手していた。また、彼らの依頼を受けて、ナムさんがフエの市場まで行って、必要な品物を入手してくるということもあった。このような交易関係は一世代だけでなく、次の世代にも受け継がれていた。例えば、前述のニョーさんの場合、ニョーさんについて高地に行っていた娘が少数民族の言葉を覚え、父の死後も父の高地での交易相手と交易を継続していた。

高地からの交易品の最終集積地は、フエの市場である。トアン市場にフエの市場から商人がやってきて、高地からの交易品を買っていくこともあった。フエ市には中華系の人々によるバオヴィン(Bao Vinh)という市場があり、船を使ってヴェトナムの他の地域に商品を送っていた。かつてはこのような港から、高地の品物が国外へと送り出されていたのであろう。

ヴェトナムの二つの戦争は、トアン市場の高地交易に大きな影響を及ぼした。抗仏戦争時(1945-1954)、高地との行き来は困難になり、トアン市場の人達の中には戦火を逃れて一時的に高地に避難する人たちもあった。銀細工師のドアン・ソーさん(Đoan Xó)はそういった避難民の一人で、抗仏戦争時代、高地のアルイ地

区に移り住んでいた。アルイに住む少数民族のパコー族(Pacoh)は、銀の装飾品を大切にす。結婚の時には銀の首飾りや耳飾りが花嫁に送られる。彼らがタバコを吸うときに使うパイプにも、銀の装飾が施されている。銀細工ができ、銀の装飾をパイプ等に施すことができるソーさんは、アルイの少数民族の間で有名になり、1954年以降にトアン市場に戻った後も、パコー族の人達がやって来て、ソーさんにパイプの装飾などを依頼していた。ソーさんは銀細工の傍ら、瑪瑙やビーズをフエで買い、アルイ地区に持って行って売ることもしていた。1960年以降になるとヴェトナム戦争の影響で、高地の少数民族は平野に下りてくることができなくなる。顧客を失ったソーさんは、自転車の修理で生計を立てるようになった。1975年以降、少数民族が再び平野に下りてこられるようになると、ソーさんは銀細工の仕事を再開した。少数民族の顧客の減少により銀細工では生計が立たず、稼業を変えなければならなくなったことは、少数民族との商業活動が副次的なものではなく、主要なものだったということの意味している。アルイ地区はヴェトナム戦争時、共産党軍の勢力圏にあり、多くの少数民族が共産党側について働いていた。戦後の共産党政権下、ソーさんとその家族は、アルイの少数民族によってしばしば助けられ守られたという。

調査グループの一人が、同様の話をクアンナム省で聞いている。バック・デー(bác đê)と呼ばれた人の話で、彼は戦時中、南ヴェトナムの警察官として高地で働く傍ら、少数民族の人達と交易を行っていた。ところが戦後、バック・デーは南ヴェトナム政府の役人だったということで、共産党政権によって再教育キャンプに送られてしまう。これに対して、戦時中共産党の側について戦った少数民族の人達が「バック・デーがいなければ交易ができず、必要なものが手に入らない」と抗議し、彼の釈放を要求した。結局バック・デーは、20日間再教育キャンプにいただけで許された。これらのエピソード

ドは高地交易が中部ヴェトナムでは主要かつ必須な経済活動の一つであったことを示唆している。

アルイ地区 (A Lu'ô'i) のタオイ、パコー族と交易

アルイ地区は1975年以降に開かれた新しい高地の地区で、フエから西に70km、海拔700メートルぐらいの山を一つ越えた所にある(写真4)。この地域はゴムのプランテーションに向いていなかったため、フランス人が入って来



写真4. フエからアルイに向かう道と道に沿って流れる川 (中村理恵撮影)



写真5. ホー・タイン・ソアさん (中村理恵撮影)

ず、戦時中は共産党の影響下にあった。ここに住む少数民族の90%は共産党側について戦った人達だという。

聞き取りをしたタオイ族 (Ta Oi) のホー・タイン・ソアさん (Hô Thanh Xoa) はアルイ地区の祖国戦線⁽²⁾の長を務めた人だ (写真5)。

ソアさんは、1960年代ゴー・ディム・ジエム (Ngô Đình Diệm) が南ヴェトナムの大統領だった時代に他のタオイ族の人達と、ビン・ディエン (Bình Điện) で南ヴェトナム軍によって拘束された時の話をしてくれた。ソアさん達は平野に下りていく途中で、政府軍に止められ拘束される。彼らが収容されているキャンプにジエム大統領が来て、ヘリコプターが離着陸できるヘリポートと、道路をアルイ地区に建設するという約束をしたのでソアさん達はアルイに戻った。戻ってみると共産党軍がおり、タオイ族のコミュニティ全体が山奥に避難することになった。この時、北ヴェトナム政府が、食べ物やその他の必需品を飛行機から落として行ってくれていたのだそうだ。ソアさん達はエアドロップされる塩や食べ物を、「ホー・チ・ミンからの贈り物」⁽³⁾と呼んだという。

トアン市場での聞き取り調査で、複数の人が「高地少数民族は金持ちだった」と話している。1975年に南北に共通の通貨ができたとき、北ヴェトナムの通貨は南ヴェトナムの通貨よりも高い割合で統一通貨と交換されたのだそうだ。共産党側についた高地の少数民族は北ヴェトナムのピアストラで賃金等を支払われていたので、沢山のお金を持っていたということらしい。

ソアさんの家にはホー・チ・ミンの漆絵が壁に掛けられ、その傍らにはマルクスとレーニンのツーショットの複合写真が飾られていた。ホー・チ・ミンの漆絵の下の祭壇には、死んだ祖先を祀るようにヴォー・グエン・ザップ将軍 (Võ Nguyên Giáp⁽⁴⁾) とグエン・チー・タイン将軍 (Nguyễn Chí Thanh⁽⁵⁾) の写真が飾られていた。この二人はソアさんにとって偉大な英雄な



写真6. ソアさんの家の祭壇 (中村理恵撮影)

のである (写真6)。ソアさんは戸棚の中から大事そうにレ・ズアン (Lê Duân)⁽⁶⁾の写真的切り抜きを出してきて、これを引き延ばして祭壇に祀る写真にしたいと話していた。彼の共産党への忠誠心は今も変わらないものようである。

アルイに住んでいる主な少数民族はモン・クメール語族 (Mon-Khmer) に属すタオイ族とパコー族 (Pacoh) である。ヴェトナムの民族分類によるとパコー族はタオイ族のサブグループと分類されていて、パコー民族としては認められていない。しかし実際には、タオイ族とパコー族の間には、明確な民族の境界がありお互いを異なる民族とみなし区別している。

アルイ地区のパコー族とタオイ族の間で交易に従事していたのは、一つの村でだいたい5～6の家族であった。交易活動でタオイ族の間で名の知られていたクイン・ホアンさん (Quynh Hoang) (写真7) は、彼の父親も交易活動に従事しており、聞き取り調査をしたパコー族のホー・タイン・フィエンさん (Hồ Thanh Phiên)



写真7. クイン・ホアンさんと奥さんのトゥエットさん (Tuyet) (チャン・キ・フーン撮影)

も父親が交易活動を行っていたと話しており、交易活動は個人の才覚にもよるが、代々受け継がれる稼業のようなものである。交易活動をする人は、他の人に依頼されて必要なものを入手しに行くこともあり、こういう時、依頼主が交易に行っている人の畑を代わりに耕す、パイ・ラップ・チャング (Pây Lạp Chàng) という制度があった。

ホアンさんはヴェトナム戦争中、共産党軍に加わり砲撃隊に所属し、ラオスで訓練を受けていた。共産党軍に参加していた1955 (または1957年) から1975年までは、交易活動は中止していた。共産党に参加する以前、彼は交易を専業としていて、村の中でも比較的裕福だったそう。戦後も交易を続けたが、どちらかという副業的なものになったという。

交易活動に従事できる人は、他の民族の言語が話せなければならない。ホアンさんの場合、彼はヴェトナム語、母語のタオイ語、ラオス語が話せる。ホアンさんは頻繁にラオスに交易に行っていたが、ラオス側に住む同族のタオイ族を介して平地のラオ族と交易するのではなく、ラオス語ができるホアンさん自身が平地まで行って、直接ラオ族と交易していた。パコー族のフィエンさん (写真8) もラオス語ができ、ラオスに交易に行っていた。彼はバヒ族 (Bahi) とも交易を行っていた。バヒ族はタオイ族のサ



写真8. ホー・タイン・フィエンさん(グエン・フック・バオ・ダン (Nguyễn Phú'óc Bảo Đản) 撮影)

ブグループと定義されており、彼らの居住区域はタオイ族とパコー族より低く、高地と平野の中間地点に居住している。フィエンさんによると、パコー語とバヒ語は類似しているので、お互いが自分の言語で話しても解りあえるということであった。フィエンさんは蜂蜜やビンロウ等と交換に、バヒ族から塩や儀礼用のドラム等を入手していたという。これに対してタオイ族のホアンさんはバヒ族とは交易していなかった。それは彼らが「不誠実で公平な交換ができない」からだそうだ。

交易人にとって、最も重要な交易相手はタオイ語でカラー (Calor) と呼ばれる、信頼のにおける親族と同じような親しい間柄になった人である。ホアンさんのフエでのカラーは、トアン市場のナムさんである。ラオス語ではカラーの

ことをセオ (Seo) といい、ホアンさんはラオスのサラヴァン (Salavan) にもラオ人のカラー/セオがいたという。フィエンさんには珍しいことにカトゥ族 (Katu) のカラーがいた。カトゥ族はモン・クメール語族に属す民族で、アルイ地区が位置するトアティーンフエ省の隣、クアンナム・ダナン省に住んでいる。カトゥ族は「血の復讐」という生贄の慣習があるために他の民族から恐れられている。フィエンさんもカトゥ族のカラーと一緒に行動するときは、食事等に非常に気を付けていたと話していた。

アルイ地区の少数民族の交易範囲は広く、ホアンさんはフエ、ダナン⁽⁷⁾ (Đà Nẵng)、ラオスのアタプー (Attapu) パクセー (Pakse) にまで行って交易をしていた。1940年代に、トアン市場のカラーであるナムさんを持ってラオスに7日間ほど行ったことがあると言う。ナムさんはラオスで沢山のラタンを買い付けて戻ってきたのだそうだ。タオイ族やパコー族の人達が交易品としてラオスで入手していたのは、織物、象、水牛、甕。また、大家族の食糧を調達するためにフィエンさんは、1990年までラオスとの国境沿いで、米などの食糧品を、鉄製品、塩、味の素などと交換していたという。ラオスで入手する織物は、木綿の糸で織られた厚手の織物で、男性が儀礼や儀式のときに着る礼服用でパコン (Pakhon) と呼ばれる。約1.2mのパコンを牛一頭と交換したというから高価な織物である。象は主に仏領時代に使われていた銀貨で買っていたという。前述のソアさんは、アルイにはかつて象が5頭いたことを覚えていた。ラオスから持ってこられた甕はラオスで生産されており、ソアさんによると、ラオスとカンボジアの国境近くのアタプー周辺で生産されているということであった。

ホアンさんの弟のクイン・ヒエンさん (Quynh Hiên) によると、ラオスでは労働力が常に不足していて、アルイからラオスに出稼ぎに行くことがよくあったという。賃金はラオスのお金で支払われたそうだが、ヴェトナム側から大勢で

働きに行ったときには、水牛や牛で支払われていた。ただ、家畜による報酬の基準が聞く人により異なり、ある人は、水牛を一頭もらうのに2週間働いたといい、別の人には1か月働いたといい、また別の人は1年間働いたというように、かなりの差があり不明な点が多い。

交易に従事するためには複数の言語が操れるということの他に、品物の良し悪しを見分けられる「目利き」であることも求められる。何処で何を入手するかは、どれぐらいの「質」のものを探しているかによる。ホアンさんは、フエのトアン市場に頻繁に交易のために行っていたが、儀式用のドラムを入手するためにわざわざ隣の省のダナン市まで行っている。ダナンで作られるドラムの方が、フエで作られるドラムよりも音色が良いからだというのがその理由である⁽⁸⁾。また、彼のカラーであるトアン市場のナムさんは、甕の良し悪しの目利きができなかったので、甕を入手する時は、フエのドンバー市場(Chợ Đông Ba)の近くに住んでいた中華系のコアさん(Khoa)⁽⁹⁾という男性の所に行って買っていた。

当初、高地交易において高地からは平野にもたらされるものは、香木など高地の森林から「採集されるもの」という認識があったのだが、実際、高地でどのようにして交易品が集められているかを調べると、それが採集されるものばかりではないことが解ってきた。例えば、ソアさんは、タオイ族の人の中には、前述の漁業用の網を作るための繊維を取るヤイという木を沢山栽培し、それを大量に象に積んで平地に持って行き売っていた人達がいたという話をしてくれた。タバコの葉を栽培してトアン市場に持って行っていた人たちもいたという。またホアンさんは、香木が平地で珍重されていることを知り、村で香木を買い集めて平地に持って行き売っていたという。私達の調査グループの一人は、クアンガイ省(Quảng Ngãi)やクアンナム省でもこれと類似した話を聞いたという。クアンガイ省のコー族(Kho)はシナモンを栽培し、

彼らがシナモンを独占的に交易品として扱っていたのだという。高地少数民族による交易品(商業作物)の栽培は、彼らが、「食べる物を耕す」だけではないということを示している。

終わりに

これまでの調査を通して解ってきたことは、ブロンソンのモデルが、高地で集められた交易品が、高地から川沿いに点在する中間集積地に集められ、そこから更に下流の港に送られて海外に送り出されるというように、高地交易を「平野からの視点」で捉えているということだ。平野に住むキン族が高地に交易品を求めやってくるという例はあるが、多くの場合、平野で交易に携わる人達は、高地からの交易品が来るのを待っており、また彼らの交易は、一本の主要な河川沿いのマーケットで行われる。これに対して、高地の少数民族は複数の選択肢を持っている。彼らは単一河川沿いのマーケットでの交易だけにとどまらず、異なる河川システムへも移動して交易を行う。タオイ族やパコー族の場合、国境を越えてラオスに入り、ラオスの河川システムを利用して交易を行っている。

高地の少数民族は、何を求めているかによって、交易相手と交易場所を取捨選択している。例えば、ラオスでも塩を作っており、塩はラオスに行っても手に入る。しかし彼らはヴェトナム側のトアン市場まで行って塩を入手する。それは、ヴェトナム産の海水から作られる塩の方が、ラオス産の岩塩よりも「おいしい」からだ。タオイ族は織物をするのに、男性の儀礼用の服の布をわざわざラオスに行き入手するのは、ラオスで織られた布の方が「美しく良質だ」からである。ホアンさんがダナン市までドラムを買いに行ったのは、クアンナム省で作られるドラムの方が、トアティン-フエ省で作られるドラムよりも「音色がいい」からである。このように、彼らは交易品の質によってどこに行き交易するかを決めており、決して一つの河川システムだけを頼って交易をしているのではな

かった。高地にいる彼らの方が、平野で交易品が来るのを待っているキン族よりも、交易地と交易品の選択肢を持っているというもできる。

高地少数民族という「未開で、後進的、焼畑農業によって自給生活をする、常に飢えと隣り合わせの貧しい人々」というイメージで描かれ語られることが多いが、この調査を通して、そのイメージは全くの誤りであるということが解ってきた。彼らは複数の言語を操り、異なる文化グループと交渉し、市場の需要に応じて商業作物を栽培する、起業性に富んだダイナミックな人達である。調査を通して見えてきた高地少数民族の新たなイメージは、ジェームス・スコット (James Scott) が説明するゾミア (Zomia) の人達と相通ずるものがある。ゾミアとはヴェトナムの中央高地から、カンボジア、ラオス、タイ、ミャンマー (ビルマ)、中国南部、北インドまでの海拔300m 以上の高地を総称して、ウイレム・ヴァン・シェンデル (Willem van Schendel) が付けた名前である (Schendel 2002)。スコットは、ゾミアの人達は完全に国家に統合されなかった人達だと説明している。彼らは中央政府による統制を嫌い、数世紀にわたり徴兵、納税、賦役などから逃れてきた人達たちだったのである。ヴェトナムの高地少数民族の「後進的で困窮している」というイメージは政府による民族統合のための「文明化政策」の失敗の結果であると言えるのかもしれない。

オスカー・セラミンク (Oscar Salemink) はヴェトナムに民族誌やヒストリオグラフィーにおいて「高地からの視点」(a view from the mountains) が欠如していると指摘している (Salemink 2011: 48)。私達調査チームは、現在の調査を継続し、高地の少数民族から見た高地交易 (彼らから見れば低地交易) の実態をさらに明らかにすることによって、今まで信じられてきた「発展のお荷物」というような高地少数民族のイメージを払拭したいと考えている。

注記

- (1) ラムドン省 (Lâm Đông) で高地交易について調査した本多守氏によると1940年から1945年、あるいは1954年から1965年の間に高地から平地に交易品を求めて下りていくという状況が逆転し、平地から商人が高地に品物を売りに行っていたという。
- (2) 傘下に労働総同盟、農民会、ホーチミン共産青年団、婦女連合、退役軍人会などを持つ政治団体。人民の権利を擁護し、国家機関を監視する。国会への法案提出権がある。
- (3) アルイ地区の少数民族は、ホー・チ・ミンと同じ、ホー (Hô) という姓を持った人が多いようである。
- (4) ヴェトナム人民軍の創始者、ホー・チ・ミンの側近。1954年の有名なディエンビエンフー (Điện Biên Phủ) の戦いでフランス軍に勝利し、抗仏戦争を終結させた。
- (5) 北ヴェトナム軍の大將。南部での共産党軍の活動を統括した。
- (6) 南北統一後の共産党書記長 (1976~1986)。社会主義建設を指導、社会主義の大規模生産に転換しようとした。
- (7) ホアンさんは、タオイ族の人10名ぐらいを連れてダナンに行った話をしてくれた。その時は、汽車に乗ってダナンに行き、車で帰ってきたそうだ。
- (8) ホアンさんは、角笛や竹を合わせて作った笛の名手でもある。
- (9) ホアンさんにとって、コアさんは、カラーではなかったようで、彼の家に宿泊したり食事の世話をしてもらったことはなかったようである。1979年に中越戦争が勃発した際、中華系のヴェトナム人は国外追放の憂き目にあい、コアさんもヴェトナム国内にはいられなくなった。ホアンさんは、自分がたまたまフエに行ってコアさんの家に挨拶に寄った時、コアさんが調度国外退去の準備をしているところで、それがコアさんに会った最後になったという話をしてくれた。

<参考文献>

Bronson, Bennet

1977 Exchange at the Upstream and Downstream Ends: Notes toward a Functional Model of the coastal State in Southeast Asia. In Karl L. Hutterer ed., *Economic Exchange and Social Interaction in Southeast Asia: Perspectives from Prehistory, History and Ethnography*. Ann Arbor: Center for South and Southeast Asian Studies, The University of Michigan. Pp39-52.

Salemink, Oscar

2011 A View from the Mountains: A critical History of Lowlander Highlander Relations in Vietnam In *The Historical Constitution of the Uplands*. Pp27-50.

Schendel, Willem van

2002 "Geographies of knowing, geographies of ignorance: jumping scale in Southeast Asia." *Environment and Planning D: Society and Space*. Vol. 20: 647-668.

Scott, James C.

2009 *The Art of Not Being Governed: an Anarchist History of Upland Southeast Asia*. New Haven & London: Yale University Press.

(客員研究員 マレーシア北方大学客員講師)